

九州天皇家論 6章 倭建の歌

赤い満月

天の香具山は香春岳

古事記の地の文には倭建は「尾張國」に戻ってきて「美夜受比売」を訪れたと書いている。

尾張國に還り来て、先の日に期りたまひし美夜受比売の許に入り座しき。

そして、「ひさかたの 天の香具山」と歌った。地の文と歌によれば、倭建がこの歌を詠んだ場所は「天香具山」が見える「尾張國」である。しかし「天の香具山」を実景と見ないで、観念上の「天香具山」であると解するのが一般的である。なぜなら、「尾張國」と「天の香具山」が一致しないからである。「尾張國」が名古屋・尾張であるとすれば、名古屋には「天の香具山」はない。「天の香具山」は観念と解することにならざるをえない。だが、倭建が帰ってきた「尾張國」とは名古屋・尾張か。

神武紀の 高尾張邑

神武東征の過程で「菟田縣」の「魁師・弟狛」が神武に情報を与える。「弟狛」はつぎのように述べる。

倭國(やまとのくに)の磯城邑(しきのむら)に、磯城の八十梟師(やそたける)有(はべ)り。又高尾張邑(たかおはりのむら)に、赤銅(あかがね)の八十梟師有り。此の類(ともがら)皆天皇と距(ふせ)き戦はむとす。臣、ひそかに天皇の為に憂へたてまつる。
(「日本書紀・神武紀」)

ここで「弟狛」は「倭國の高尾張邑」と云っている。この「倭國」は神武が都を定めた國で、香春町である。香春町に「高尾張邑」がある。その王が「赤銅の八十梟師」である。このように伝えたのである。「赤銅」とは香春二の岳が銅を産出したことに由来する名前であろう。その「赤銅の八十梟師」が支配する邑の名前が「高尾張」である。ここに「尾張邑」が登場する。この「尾張邑」とは九州天皇家の尾張である。名古屋ではない。

古事記の 尾張國

故、是の人其の鵠を追ひ尋ねて、木國より針間國に到り、亦追ひて稻羽國に越え、即ち旦波國、多遲麻國に到り、東の方に追ひ廻りて、近淡海國に到り、乃ち三野國に越え、尾張國より伝ひて科野國に追ひ、遂に高志國に追ひ到りて、和那美の水門に網を張りて、其の鳥を取りて持ち上りて献りき。

(古事記・垂仁)

垂心記には「木國」「針間國」「稻羽國」「旦波國」「多遲麻國」「近淡海國」「三野國」「尾張國」「科野國」「高志國」が登場する。

- (1)「木國」:神武東征の際、兄が死んだのは、「紀國の男之水門」である。この「紀國」が「木國」である。企救半島に存在した古代国である。
- (2)「三野國」:崇神記に登場する。

意富多泥古と謂ふ人を求めたまひし時、河内の美努村に其の人を見得て貢進りき。……また宇陀の墨坂神に赤色の盾矛を祭り、また大坂神に墨色の盾矛を祭り、又坂の御尾の神及び河の瀬の神に、悉に遺し忘ること無く幣帛を奉りたまひき。
(古事記崇神天皇)

「三野」とは「河内の美努村」とも書く。神武天皇が侵入した小倉南区の古代国である。「宇陀の墨坂」は神武天皇が戦った相手が治めていた古代国である。「墨坂」とは敵将「八十梟師」が立て籠もった山城へ通じる坂の名前である。焼け墨を置いた所からこの名がついた。これらは九州天皇家の河内、小倉南区の古代國名である。

これらの古代国は現代で云う、「紀伊」「播磨」「因幡」「丹波」「但馬」「近江」「美濃」「尾張」「信濃」「越」ではない。「鵜(くい)」を捕らえるために、全国のこれらの国々を網を持って探し回ったということではない。崇神記の國々は全て九州天皇家の古代國である。「尾張國」も同じ北九州に存在した九州天皇家の古代国である。

彦島の古代国「小椅(オバシ)」

ところが、更に古い時代に「小椅(オバシ)」という古代国が彦島に存在した。この「小椅(オバシ)」が「尾羽張」となった。このように、西井氏は主張する。

兄の小椅君とは「オバ(地名)」+「シ(村を示す語尾)」+「君(称号)」である。「オバ」は尾羽張[オバリ]神(記。紀雄走[オバシ]神)の「オバ」だ。同神はイザナギのカグツチ討ちにその太刀の名になって登場した。その武将になって活躍したのであろう……やがて、この地は「乎波利」と誤導され「尾張」國と翻訳されていく。倭建が東征の帰路に立ち寄る宮簀姫の尾張も、原伝承ではこのオバの地である。また、垂仁記の二俣温のあった尾張の相津、開化記の大毘古が息子に遇う相津も乎波利の阿比良比売の「アヒ・(ウ)ラ」の地ではなかったか。
(西井論文「当藝志耳とタギの地」より)

西井氏は彦島に「尾張國」があったと指摘する。「小椅君」とは神武が最初に結婚した妻の実家の名前である。神武の最初の妻は「阿多の小椅君の妹、名は阿比良比売」だった。「阿多」とは、本来、親指と人差し指でできる直角の形のことである。その直角に曲がる瀬戸、彦島小戸の王が「小椅君」だった。

これが西井氏の解析である。西井氏の解釈を裏付ける記事は古事記にある。天照大御神が「葦原中國」を大国主命から譲渡させようとして、「天(あま)」の武将を派遣する。ところが、出雲の國はすばらしく、武将は帰ってこない。そこで思金神に相談する。

天の安河の河上の天の岩屋に坐す、名は伊都之尾羽神、是を遣はすべし。もし亦此の神に非ずば、其の神の子、建御雷之男神、是れ遣はすべし。
(「古事記上巻」)

最後に出雲に派遣される武将の名前が「伊都之尾羽神」である。この「尾羽神」の在所が「尾張」であろう。神武東征以前、「天(彦島)」から「葦原中國(小倉北区)」に渡ったこの「尾羽神」が支配する國が「天の香具山」がある香春町(田川市)に存在した。そして神武東征時にはこの國は「又高尾張邑(たかおはりのむら)の赤銅(あかがね)の八十梟師」が支配する國だった。このようにも考えられる。

天の香具山は香春岳

伊予の國の風土記に曰わく、伊与の郡。郡家より東北のかたに天山(あめやま)あり。天山と名づくる由(ゆえ)は、倭(やまと)に天加俱山(あまのかぐやま)あり。天より天降(あも)りし時、二つに分かれて片端(かたはし)は倭の國に天降(あまくだ)り、片端は此の土(くに)に天降りき。因りて天山と謂う。本(ことのもと)なり。
逸文 伊予國風土記 天山(あめやま)

この短い「伊予國」風土記の記録から多くを読みとることができる。まず「伊予」とはどこか。「伊予」とは「伊予二名嶋」の「伊予」である。この國の女王は「伊予」はまた「豊」とも云われていた。よって「二名嶋」という国名となった。「伊予」とは彦島老町に存在した九州天皇家の古代国である。彦島老町の風土記である「伊予風土記」は

「倭(やまと)に天加俱山(あまのかぐやま)あり」と、伝えている。この「倭(やまと)」とは奈良ではなく、香春町・田川市である。香春町には香春岳がある。三つの連山を総称して「香春岳」と呼ばれている。この連山の一つ、香春一ノ岳が「伊予風土記」に紹介された「天加俱山(あまのかぐやま)」である。この山は、まるで「畑の畝」のように並んでいる。よって「畝傍山」とも云われた。神武がここに都を拓いた時、「畝傍山」と云った「倭(やまと)」の国の象徴的な連山である。

観れば、夫(か)の畝傍山(うねび)の東南(たつみのすみ)の樞原の地(ところ)は、蓋(けだ)し國の
塙區(もなかのくしら)か。治(み)やこつくるべし。
(日本書紀・神武天皇)



一番右の山が「天の香具山」である。本来、香春町は「天(あま)」ではない。「天(あま)」とは彦島である。神武の時代、香春町は「倭國」と呼ばれていた。従って、この山が、「天(あま)の香具山」という名前ではふさわしくない。その理由を「伊予國」風土記は解説している。

天の香具山は 伊与の天山(あめやま)の分かれ



この「倭國」の「天香具山」は「天(あま)國の伊豫」の「天山(あめやま)」の分かれである。だから、普通に考えれば、「倭國の香具山」と呼ぶべきなのが、「天(あま)の天山」の分かれだから、「倭國」にあっても、「天の香具山」と云うのだと、説明している。彦島が「天(あま)」と呼ばれ、香春町が「倭」と呼ばれていたという現実認識に立った説話である。倭建が詠った「天香具山」とは香春岳である。

「伊予」風土記は、「伊与の郡。郡家より東北のかたに天山(あめやま)あり。」と、伝えている。では、この本来の「天山(あめやま)」とはどの山を云ったのか。「伊予」とは下関市彦島の老町である。老町に「伊予」風土記が伝える山があるか。「郡家より東北のかた」の山、伊与の天山(あめやま)とは小戸山である。

情景

「天の香具山」の麓、小高い丘の「美夜受比売」の家。作歌時刻は夕方。「美夜受比売」は真っ白な襲を着ている。月が昇ってくる。部屋に月の光がさしこむ。やがて、天空に白い満月が浮かぶ。白い月の光に包まれて女はいっそう白く輝く。

ひさかたの 天の香具山 利鎌に さ渡る久毘 弱細 手弱腕を 枕かむ 我はすれど
さ寝むとは 我は思へど 汝が著せる 襲の裾に 月立ちにけり

高光る 日の御子 やすみしし 我が大君 あらたまの 年が 来経れば あらたまの
月は来経往く 諾な諾な諾な 君待ち難に 我が著せる 襲の裾に 月立たなむよ

大意

向こうに見える天の香具山。香具山に向かって雁が鎌のような隊形で渡っていく。雁の首のように、か弱く、細いしなやかな貴女の腕を枕に、寝たいと思うけれど。

…あなたが着ている白い襲の裾に赤い満月が昇ってしまいました。

空高く、太陽のように輝く貴方は日の御子。八方の領土を支配するわが大君よ。新しい年がくれば、月は欠けていって、新しい月となって生まれ変わります。分かっています。分かっています。分かっていますとも。貴方が来ることができないわけはよくよく分かっています。分かっていますが、逢いたい。逢いたくて待ちきれませんわ。

…待っても、待っても来ない貴方を待ちきれなくて、月も昇ってしまったことですわ。